

はじめての歎異抄講座

1.本章の内容

前章において他力念仏の信仰は親子の関係を超越するということを示していますが、さらにこの章では師弟の関係をも超越するということを示されています。他力念仏による回向はすべて阿弥陀如来からのほたらきによって届くもので、その絶対他力の前にはわが弟子、人の弟子という区別もありません。かつて親鸞聖人の弟子であった信樂が彼のもとを離れたとき、彼が与えた本尊や聖教を取り返したらどうかと言った弟子に対し、「本尊、聖教は衆生利益の方便なれば、親鸞がむつびをすてて、他の門室にいるというとも、わたくしに自専すべからず」(『口伝鈔』)と語ったといひます。

2.仏教は実践の教え

仏教の起源はブツダ(仏陀、釈迦、釈尊、釈迦牟尼世尊、前460～前380頃)にさかのぼります。悟りを開いたブツダは中道ちゅうどうと四諦したいはっしょうどう八聖道の教えを、性や身分の違いを超えて、誰にでも説いたといわれます。その教えはヴェーダやウパニシャッドなどの支配階級による価値体系とは対照的で、万人に開放された真の悟りの道、解脱の道であり、仏教が平等主義、平和主義といわれる所以です。

ブツダの説いた中道は非苦非楽、四諦は、四つの真理を指します。

- (1)苦諦くたい…人生は苦しみであるという真理
- (2)集諦じったい…苦しみの原因は愛着、渴愛にあるという真理
- (3)滅諦めつたい…苦しみの原因は滅せられるべきであるという真理
- (4)道諦どうたい…苦の滅に導く道についての真理

道諦の内容が八正道で、正見はっしょうどう(正しい見解)、正思惟しょうけん(正しい思惟)、正語しょうしゆい(正しい言葉)、正業しょうご(正しい行為)、正命しょうみょう(正しい生活)、正精進しょうしやうじん(正しい努力)、正念しょうねん(正しい思念)、正定しょうじやう(正しい瞑想)

ヴェーダ	仏教
アーリヤ (外来)	非アーリヤ (自生、土着)
イラン (西方起源)	インダス文明 (インド亜大陸起源)
学習による知識	実践による力
バラモン教	反バラモン教的思想・宗教運動
カーストの身分秩序	反カースト
社会的威信・権威	反権威主義 (自尊)
社会・集団	個人
バラモン至上主義	反バラモン
動物供犠	不殺生・肉食主義

とされます。四諦八正道の実践の違いについて、仏教は三つ分類ができます。これは空海の真言宗、親鸞聖人の浄土真宗、道元禅師の曹洞宗の三者の教えに見る違いでもあります。

(1) ヨーガ (禅はその一種) …心身の沈静化によってさとりを目指す方法

(2) バクティ (帰依、阿弥陀如来などへの帰依) …心身を阿弥陀如来などに捧げる方法

(3) ヨーガとバクティの統一 (密教) …上記二者の総合

法然聖人の「はからいを捨てて、己のすべてを阿弥陀如来に捧げる」という自我放逐の教えは親鸞聖人によってさらに深化を遂げ、現世でヨーガによって仏を見ること (見仏) や仏になろうとすること (成仏) を否定し、念仏による来世での成仏 (念佛成仏) や、心身の修練をはじめとするさまざまな「はからい」から離れる「^{じねんほうに}自然法爾」という思想に最終的にたどりつきました。

3.万人共通のすくいが「我が」すくいになる

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと (法然) の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり」(『歎異抄』第2章)

「聖人の仰せには、『善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。(中略) 煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします』とこそ仰せは候ひしか」(『歎異抄』後序)

★親鸞聖人の「総じてもつて存知せざるなり」というお言葉が『歎異抄』に二カ所見られます。これは、自分中心の眼しか持ち合わせないわたしには本当の意味での真偽はわからないという「嘆き」であり、念仏が浄土への道なのかどうか、何が本当の善なのか悪なのか、私にはまったく分からないとは分別の世界で生きるわたしの限界を、無分別の智慧 (無分別智^{むぶんべつち}) によって超えていく以外、わたしにはすくいの方法がみあたらないという「告白」でもあります。

⇒万人に開かれたすくいが、「わたしの」すくいになった瞬間の、絶対帰依の心底ともいえるでしょう。宗教に求められるのはこの「わたしの」すくいとしていただき、聞いていく視点ではないでしょうか。

以上